

第9回「(仮称)新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議」会議録

日 時 平成22年3月29日(月)午後1時30分～3時

場 所 中央図書館3階 ビーンズホール

・次 第

1 開 会

2 教育次長あいさつ

3 議 事

(1)「新潟市子ども読書活動推進計画」(案)に対するパブリックコメントの概要と
新旧対照表について

(2)平成22年度の取組について

(3)その他

4 閉 会

・出席者

委員：足立委員 荒川委員 佐藤委員 正道委員 高野委員 間藤委員 宮下委員

事務局：保育課斉藤補佐(指導保育士)・学校支援課仲川副参事・青野司書(鳥屋野小学校)

中央図書館：八木教育次長(館長)・上山企画管理課長・持田企画管理課長
補佐・子安サービス課サービス第1係長・真島副主幹・真柄
主査・三條主査・餅谷副主査・金子司書

豊栄図書館：岩野館長・学校図書館支援センター石原副主幹(司書)

新津図書館：三田館長

白根図書館：石口館長

西川図書館：松原館長・学校図書館支援センター加藤副主幹(司書)

・傍聴者 1名

1. 開 会

(司 会)

ただいまから、第9回(仮称)新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を始めます。
開会にあたりまして、八木教育次長から一言ごあいさついたします。

2. 教育次長挨拶

(八木教育次長)

年度末にご参集いただき、大変ありがとうございます。

第8回を10月29日に開催してから、約半年ぶりとなります。その間、計画素案を教育委員会会議、市議会・文教経済常任委員会、社会教育委員会会議、小学校長会、中学校長会、それぞれに説明し、意見もいただけてきました。今年に入り、1月から2月にかけてパブリックコメントを実施しました。議員の方からは、特に22年度予算に関連して、計画策定を評価するという意見や、ブックスタート関連を特に評価する声が非常に高かったです。

本日、この有識者会議は最終回となります。パブリックコメントの結果や、それに基づく修正点などを説明し、併せて、22年度の取組について若干説明させていただきます。最後の機会となるので、忌憚のない意見いただきたいと思っております。

2. 議 事

(1)「新潟市子ども読書活動推進計画」(案)に対するパブリックコメントの概要と新旧
対照表について

(事務局)

新潟市子ども読書活動推進計画(案)に対するパブリックコメントを実施した。「パブリックコメントの実施状況」と書かれた資料をご覧ください。パブリックコメントは、計画に対する市民の意見を聞くもので、1月18日から2月16日までの1か月間実施し、12人の方から18件の意見をいただいた。

項目別では、第2章の「子どもの読書活動を推進するための方策」に関するものが17件、第3章の「計画推進のために」に関するものが1件だった。

意見等の概要と市の考え方をご覧ください。8件が「ブックスタート」に関するもので、「ブックスタート事業を早期に実施してほしい」という趣旨のものが5件あった。素案の

段階で説明したが、予算を伴うものであるため、案の段階では「検討」としてきた。22年度予算で、わずかだが準備のための予算がついたので、「ブックスタート」を実施することについて、「検討」から「実施」と修正した。

このほか、字句の修正が2件あり、「アニメーション」の説明をより具体的にしたということと、「ティーンズ世代へ」というところで、ティーンズ向けの通信に、具体的に「本の紹介」という言葉を入れてほしいということで、追加をさせていただいた。これ以外の意見については、「修正なし」としてホームページに公開した。

パブリックコメントの評価についてだが、今年度、新潟市が行っているパブリックコメントのうち、取りまとめが終わり市のホームページに公開しているものが16件ある。この16の案件について意見提出者数を見てみると、12の案件で0または1人という状況だ。その中であって、「子ども読書活動推進計画」の意見提出者数は12人18件で、上から2番目という状況になっている。ちなみに一番数が多かった案件は、東区の庁舎移転に関するもので、東区庁舎をイトーヨーカドー跡地に移転するにあたってのパブリックコメントを求めたもので、32人81件という数字は、今年度中でトップだった。「子ども読書活動推進計画」はそれに次ぎ、3番目は、図書館で同時に進めてきた「新潟市立図書館ビジョン」に関するものだった。

意見提出者12人の意見を見ると、案件に対する利害関係ということではなく、それぞれ、子どもの読書について深い関心をお持ちの方が多く、このうちの8人が「ブックスタート」にかかわる意見を挙げていた。ブックスタート事業に対する期待の大きさと受け止めたい。

次に、改正案と現行案の比較を載せた『「新潟市子ども読書活動推進計画」修正箇所新旧対照表』について、3つだけ説明させていただく。

1つめは「前文」だが、案の段階の趣旨をいかしながら全面修正をした。表題も、案の段階では「子どもの読書環境の整備とは」とし、一番大事な点についての考え方を載せたのだが、これを「豊かな子どもの読書環境づくりのために」とし、計画のねらいを分かりやすく記述した。

子どもの読書環境を構成する「本があること」「場所があるということ」「それをつなぐ人がいる」という3つの要素について、2番目を「場所と時間」とした。学校図書館司書からの提案を受けてのことだ。有識者会議での「現状と課題」の分析の中で、子どもたちの生活時間の中における様々な電子メディアに費やす時間の多さということが話された。佐藤委員からもかなり強く紹介をいただいた。場所だけ設けても仕方がない、子どもたちの生活の中で読書の時間が持てることも一つの読書環境だ、という主旨で修正した。

「前文」の最後の5行、『この計画は、新潟市のすべての子どもたちが本に親しみ、読書習慣を身につけることを願い、家庭はもちろん、地域、保育園・幼稚園、学校、公民館・図書

館など、子どもにかかわる人や機関が連携して、豊かな「子ども読書環境」づくりを進めることを目指して策定しました。』という文を追加し、計画が目指すものをコンパクトにまとめた。

2つめは、先ほど説明したとおり、ブックスタートを「実施」に変更したことだ。

3つめは、第2章の「2 保育園・幼稚園」のところで、市の取組に「② 地域読書推進事業」を新たに追加した。これは、3月24日に行った庁内検討委員会で保育課長から説明があったもので、保育園などへ絵本を配布して地域の方々へも貸出をするという、平成22年度の新規事業だ。国の21年度の補正予算で拡充された「安心子ども基金」に基づく「地域子育て創生事業」で、地域子育て支援活動などに交付するものだ。この事業提案を受け、保育課が中心になって検討し、この基金の配分金から「地域読書推進事業」という名称で事業化したものだ。

具体的には、私立を含む保育園・幼稚園・地域子育て支援センターなどに、新規に絵本をそれぞれ200冊程度寄贈して、地域の方々にも貸出をする。この事業は保育課が中心になり、庁内検討委員会構成課でもある子ども未来課や各区の健康福祉課のほか、図書館も絵本の選書などでかかわっていくことになる。3月に入り、事業の内容がはっきりしてきたので、「子ども読書活動推進計画」に追加させていただいた。

これらを修正したものが、先に送付した修正後の「新潟市子ども読書活動推進計画」だ。そこに市長の挨拶と有識者会議委員7人のメッセージ、付属資料を加えて印刷・製本をしていきたい。併せて、概要版を作成しているので、新年度に入ってから関係機関などに配布したいと考えている。

(荒川座長)

パブリックコメントの実施状況、修正箇所の新旧対照表について、何か質問・意見があったらお願いしたい。「ブックスタート」は、いかに関心が高いかが分かったという話をされたが、「検討」から「実施」に進んだので、非常にいいことだ。

(佐藤委員)

「ブックスタート」の調査のための予算がついたという話があったが、実施するかどうかの判断は、これからどのような手順になっていくのか。

(事務局)

実施を前提に準備予算をつけるということになるので、実施していきたいと思っている。

(八木教育次長)

前文をだいぶ修正させていただいたが、このとおりでよろしいか。人それぞれ受け止め方が違う。前のものが堅いという方もいたので。

(荒川座長)

分かりやすいと思って見ていた。

(間藤委員)

あかちゃんの一番最初の読み聞かせについて、文字を全く知らない子どもがどのような形で本に出合っていくのかという例を紹介する。

谷川俊太郎さんの絵本『これはおひさま』(大橋 歩/え)を、1歳の赤ちゃんが150回も読んでもらったと聞いたことがある。この絵本は、マザーグースに似たようなもので、「これはおひさまのしたのむぎばたけ」というふうにどんどん言葉がつながって行って、最後の方は長い言葉になっていくような内容だ。

私が新大附属幼稚園の園長をしていたときに、非常勤講師でいた方が、谷川さんが来園された際、この本を持ってきて「サインしてほしい。うちの1歳の子どもに150回もこれを読まされた」と言っていた。谷川さんは「僕の本の最年少愛読者ですね」と言われていた。

「おひさま」という言葉そのものも知らない年齢だと思うのだが、最初に非常にはっきりとした赤い「おひさま」の絵が出てくる。最後にまた出てくるのだが、あとは言葉がどんどん出てくる。多分、お兄さんかお姉さんに向けて読んでやっていて、この子に向けては読んでいない。たまたまそばで転がって聞いていて、なぜか興味を持ち、今度は単独で「うんうんうん」とこの絵本を持ってきて、読んでしまうと、また「うんうん」とせがんだようだ。

なぜなのかというと、一つは大きな「おひさま」の絵のインパクト、それからお母さんが語ってくれる言葉は分からないのだが、星雲のような形で、文字も言葉の形もとっていないのだが、読んであげるときというのは、1歳の子どもにこうやって(面と向かって)読んであげるといえることはないと思う。抱いて読んであげることが赤ちゃんの本の読み聞かせに大切なことで、絵本はどんなものでもいい。言葉が語られていて、肌に触れながら見ているということの方があかちゃんの気持ちが安定する。それは、言葉や何かに対して関心を持っていくということに非常に大事な要素になる。

読書活動推進計画なのだから、そこは非常に重要な目的なのだが、ブックスタートの際は、お母さんとのふれあいと書いてあるが、もう少し具体的にはっきりと、「心の安定のようなものがとても大切だ」みたいなものをここに入れておくのもどうかと思い、この絵本を持ってきた。

(荒川座長)

先生のお話は、最初の書き出しにはその趣旨のことは書かれているが、さらにそこに少し裏打ちをしたいということでしょうか。

(間藤委員)

ついでに言うならば、これは我が家の経験なのだが、『What Do People Do All Day?』（リチャード・スキャリー／作）は、私の子どもが生まれたときに、大学の女性の先生が「うちの子どもがとても好きだった」と言ってプレゼントしてくれた。そのお子さんたちは、当時小学生だったので、相当大きくなってから読んでいたのかと思って見たら、100 ページあった。日本語で言えば、大人は毎日どんな暮らしをしているかという内容だ。

1歳の子どもは、見ても全然分からない。だから、私も読んで聞かせたことはなく、あとで読んであげることもあるかと思っていたが、生まれたばかりのときにもらったものなので、その本のことは忘れていた。子どもが3歳くらいのときにふっと見ると、やたらにセロテープをその本に貼っていた。はじめはよく分からなかったのだが、何回も繰り返し見ているうちに、ある一つのものを中心にしてセロテープを貼っていることがようやく分かり、こうやって遊んでいたのかと思った。ボロボロになっているが、私はほとんどこの本を読んだことがない。

(荒川座長)

その本は私も今から40年前にアメリカで見つけて、全部で4冊ほどあるのだが、私の2人の子どもには全て与えた。今、うちの孫は10歳だが、3歳の時にこれを与えた。なかなかおもしろい本だ。

(間藤委員)

シリーズがある。これは67年の出版のもの。

(荒川座長)

この本は大人が英語を始めるときにもいいと思って、私は大人の方にもあげていた。

(足立委員)

アメリカの小学校の教室で、その本を使っているところを見たことがある。

(間藤委員)

なぜ紹介したかという、絵本というのは、小さい子にとっておもちゃの一つという感覚もあるということなのだ。あまり読書というふうになると、お母さんの中には窮屈に考えてしまう可能性がある。絵本は、子どもにとってはあくまでもおもちゃの一つなのではないか。やがておもちゃから発展して、本そのものに興味を持っていくということも十分あり得るのではないか。我が家の子どもの場合、何を貼ってあるのか初めはまったく見当がつかなかったのだが、実は絵本の中にほとんど無関係なものにだけ貼っている。そういう奇妙な子どもの世界のおもしろさというものを発見した覚えがある。

この2つで、小さい子どもが絵本に出合っていくというのはどういうことなのか、それを

通して親が子どもと一緒にかかわりながら子どもの世界を知っていくという、情報交換のようなものが絵本にはあるのではないかと思う。その辺りは、あまり一方的に言葉にかかわらず、心の部分の発達のようなものもどこかに入れておくと、ブックスタートのときにももう少し具体的に、その大切さを受けた形でいけるのではないかと思った。

(事務局)

題名を教えてください。

(間藤委員)

『What Do People Do All Day?』という「人は何をしているのかな」、つまりこれは大人のことだ。

(荒川座長)

Richard Scarry (リチャード・スキャリー)。日本で売っているものも英語だが、Richard Scarry というとだいたい分かる。

(間藤委員)

これは多分、人々はどんな暮らしをしているのか、どんな仕事をしているのかだったか、というような内容かと思う。私も持っていないので。図書館ではどうか。

(事務局)

おそらく入っていたと思う。

(荒川座長)

私は自分用にも持っている。

(間藤委員)

100 ページなので、普通の絵本というのではない。ただ、絵が漫画的なので、そういう意味では子どもがめくっていけば、読み聞かせしなくても遊べる本ではないか。

(荒川座長)

計画は非常によくできていると思っているが、他にはどうか。

(正道委員)

前文もとても分かりやすくなり、親しみやすく入れるのではないかと思った。

市民の念願だったブックスタートがいよいよ始まるということと、各学校への配本システムができるということについては、前から繰り返しお願いしても、いつも予算がない、諸般の事情や、あるいは公共図書館と学校図書館は違うということで先送りになっていた。この計画で子どもに関するいろいろな管轄部署の方々が横の連携を取って、こういう形でまとまったというのは、とてもうれしいことだ。

(足立委員)

アニメシオンの用語解説に修正が入った。「ゲーム的手法による読書指導法で」の「ゲーム」というのは誤解を受けるということで、「対話を重視し創造的な遊びの手法による読書方法で」と修正してくれた。これは、元々英語で言う「Play」に当たる「遊び」という単語を、スペイン語から日本語へどのように訳すかということだ。何かルールがあって、そこでみんながわいわい対話をしながら実施していくというのは、「ゲーム」という概念に近いのではないかとということで「ゲーム」と訳された方がいた。それを市民の方々から、パブリックコメントでこういう形でコメントをつけたということ自体が、私はすごくうれしく思う。アニメシオンの本質をとらえての修正で、「ゲーム」という訳し方も悪くないのだが、ほかに想像させるものがあるあるので、誤解を生まないようにということだ。

「きいちごの会」というボランティアの方たちが、このところアニメシオンを実施するためにいろいろな学校に入って、自分たちで教材を組み立てるという努力をされていて、市立図書館の方々にサポートしていただいている。3月13日の勉強会に私も参加させていただいた。市民の方にこんな形でアニメシオンが広がっているということは、市の体制としてこれをサポートしていくということがしっかり位置づけられていることは、とてもうれしく思う。

(荒川座長)

他になれば、計画については、これでまとめるということにする。

(2) 平成 22 年度の取組について

(事務局)

計画は、平成 22 年度から実施段階に入る。ここでは、計画に基づく取組の中から、22 年度から実施する主な事業について、『「新潟市子ども読書活動推進計画」平成 22 年度の取組』に基づいて説明する。

1 番目は、「子ども読書活動推進計画庁内推進会議」の設置。現在の庁内検討委員会を引き継ぎ、17 の課と機関で計画を確実に進めていきたい。また、この組織の中に部会として「学校図書館関係課・機関連絡会議」を設け、学校図書館支援センターの取組や、学校図書館の蔵書のコンピュータ化などについても、検討していきたいと考えている。

2 番目の「ブックスタート事業の検討」。ここで「検討」という言葉を使っているのは、平成 22 年度に検討ということで、この言葉を使っている。「ブックスタートの実施について(案)」をご覧いただきたい。実施についての現段階での案だ。事業の目的等についてはあえて触れないが、2 の「実施方法」について見ていただきたい。現在、想定している実施方法だが、新潟市のあかちゃんの出生数は、毎年だいたい 6,500 人で、この新生児 6,500 人を対

象にしている。新潟市内全8区で12か所の地域保健福祉センターで、4か月児を対象にした股関節健診が行われている。そこで行いたいと今の段階では考えている。昨年の暮れ以降、事務局で、この12か所すべて健診会場を回ってきた。ほぼできるのではないかという感触を持っている。

3の「スケジュール」をご覧いただきたい。具体的な平成22年度の取組だが、ブックスタート推進検討委員会というものを設置したい。これは、図書館だけでできるものではない。関係課とともに、基本方針や実施計画を作っていきたい。全体の基本方針を作る本部会議と、各区において実際に現場を見ながらどういう形で実施できるのか検討する区部会議を設けたい。市役所の中だけではなく、この問題に関心を寄せていただく市民の方も含めた検討委員会を作っていきたい。

このブックスタート事業を実施する鍵となるのが、「(仮称)ブックスタートボランティア」だ。たくさんのボランティアの方から参加していただいて、文字どおり地域ぐるみで、あかちゃんのと時から子育て支援、あるいは子どもの読書活動支援ということで、市民と一緒にこの事業を実施していきたい。ブックスタートボランティアの募集と、新たにブックスタートボランティアに参加したいという方のための養成講座を行いたい。

5の「課題」について、2つ挙げた。1つは、健診等と連携した実施場所の確保。これはほぼ確保できるだろうと考えている。もう1つは、ブックスタートボランティアの確保と養成。12か所で年間100回を超える股関節健診の場を借りて実施することになると思う。この事業に対する市民の理解をいただき、全市でたくさんの市民の方から、ブックスタートボランティアとして事業にかかわっていただく必要があると考えている。

6の「費用」だが、22年度は予算が80万円。わずか80万円だが、制度実施に向けた市役所内での了解が取れたと判断している。この80万円は準備費用で、主にボランティア養成講座や、ブックスタートについて広報を行っていききたい。実施段階にはいる23年度以降は、毎年800万円くらいの予算が必要ではないかと考えている。

3番目は「学校への団体貸出配送システムの整備」。今ほど正道委員からもお話をいただいたが、学校の授業などで使う市立図書館の本を、新たに宅配で配送・回収する。有識者会議では、第1回の会議のときから提案をいただいていた事業だ。昨年11月から12月の1月半をかけ、中央図書館と西川図書館で試行を実施した。この期間中、2つの図書館で、中央区と江南区、西蒲区に限定をして、小中学校へ宅配便による団体貸出を行った。この1月半ほどの間に50箱、1,264冊の資料を宅配によって配送し、回収も行った。この1,264冊という数字を前年度と比較したところ、両館の対象区の小・中学校への団体貸出冊数が倍増した。学校側からも極めて好評をいただき、図書館として実施できるのではないかという感触を得

たところだ。新年度4月下旬からスタートすることにしており、各学校に案内する予定だ。

4番目は「学校図書館支援センター」。西川、豊栄に続き、22年度は新たに3つ目の学校図書館支援センターを白根図書館に設置し、南区内の学校図書館へ支援を行う。区により、学校図書館の状況は異なっている。20年度にスタートした西蒲区の場合、21校すべてが合併市町村の学校ということで、すべての学校図書館司書が学期雇用の臨時職員だ。今年度スタートした豊栄図書館が持つ北区のエリアは同じく21校なのだが、旧新潟市域と旧豊栄市域をあわせ持っていて、旧新潟市域には以前から学校に司書がいる運営をしてきた。旧豊栄市域は、司書配置がなされていないかわりに、豊栄図書館スタートと同時に自動車文庫、私どもはブックモバイル（BM）と言っているが、自動車文庫によるサービスを行ったり、各学校のクラスごとに、学級文庫としてセット貸しをするという取組をしてきた。来年度、新たにスタートする白根がある南区は、すべての学校が合併区域で、旧白根市域については、豊栄と同様、自動車文庫によるサービスや、学校訪問して読み聞かせやブックトークなど、かなり足繁くサービスをしてきたところだ。置かれている状況は3区ともかなり違うが、それぞれの区の状況に合わせた運営と、3つになるセンターの連絡調整など、これまで以上に大事になってくると考えている。

5番目は「学校図書館活用研修の開催」。これは仮の題だが、学校図書館を今以上に活用するために、小・中学校の教員と学校図書館司書の合同研修会を新たに開催したいと考えている。これは「子どもの読書活動推進計画」の「学校」の中にある「司書教諭、図書館主任と学校図書館司書の研修の在り方検討」に該当する事業だ。学校図書館支援センターの取組の中でも合同の研修会が必要という声が出されており、西蒲区と北区の支援センター運営協議会においても、学校側からそのような研修が必要だという声を今年に入ってもいただいた。在り方検討を含めて、具体的に実施してみようということで取り組みたい。22年度は、西蒲区の学校図書館支援センターを中心とした市立図書館と、教職員研修を担当している総合教育センターと共催で、試行的に西蒲区で実施したいと考えている。

最後に6番目の「地域読書推進事業」だが、これについては、先ほど説明したとおりだ。

（正道委員）

語句の問題なのだが、「ブックスタートの実施について（案）」の「2 実施方法」、「乳幼児期の保護者に絵本をプレゼントする。その際、実際に乳幼児に対して絵本の読み聞かせを行い、意義について説明を行う」のところだが、これは順序が逆ではないか。「乳幼児の保護者に、例えば絵本を仲立ちとして親子が豊かなふれあいの時間を持つ意義について説明を行い、その際に、実際に乳幼児に対して本の読み聞かせを行い、絵本をプレゼントする」で、絵本をプレゼントするというのは一番最後ではないか。予算的にはこれがくるのだろうが、

文章にしたときのニュアンスが一番重要なのは、子どもと親のふれあい、あるいは子どもと読書、本についてのかかわりを説明していくということが肝心なのではないか。

(事務局)

おっしゃるとおりだ。修正したい。

(荒川座長)

取組の4番にある学校図書館支援センターの担当者が来ているが、実際はどうか。

(事務局)

今年度新たに始まった北区の支援センターについて、1年間の感想などを出してもらおう。

(北区学校図書館支援センター)

感想ということで述べさせてもらおう。北区は支援センターとして2つ目になり、先行の西蒲区が実施しているところを見習いながら進めてきた。学校図書館の置かれた状況は、違うところも確かにあるが、同じような部分もある。来年度は支援センターが3つになるので、これまでの取組を検証して、協力しあいながら一緒に進めていくところ別々に実施するところを、これから検討していく必要があるのではないかと感じている。

(荒川座長)

実際に学校に行ったりしているのか。

(北区学校図書館支援センター)

訪問している。例えば学校図書館の古くなった蔵書の除籍など、どの区でも共通する部分は全体的に同じような足並みで実施していき、まだ支援センターがないところでも、同じように実施していくような形にすれば、もう少し効率よくできるのでは、というような感じだ。

(事務局)

去年の4月にスタートして、最初の北区の学校図書館司書全体の集まりと今年に入ってから学校司書を集めた研修、あるいは情報交換会の印象について、変化はあったか。

(北区学校図書館支援センター)

去年の最初の集まりではほとんど発言がなかったが、今年に入ってから情報交換会はいろいろな話が出されて、時間切れで話題が半分もいかないようになってきた。最初のころは、小中学校別にした方がそれぞれ話も出るのかとも考えてもいたのだが、実際、一緒に集まってみると、小学校、中学校が続いている部分もある。小学校の司書は、高学年の読書についてどういうふうに進めていくか迷っているのでも、中学校と一緒に実施していくといい部分もあるのではないかと今は思っている。

(佐藤委員)

ブックスタートに戻るが、今は6か月健診を集団で実施していないので、股関節健診を選

ばれたと思うのだが、股関節健診が今後も継続的に行われていくかどうかという問題がある。保健所と連携して、適切な時期を選んでいただきたい。

(荒川座長)

学校への図書の運搬事業の試行は、うまくいったのか。

(事務局)

本当に長い間、学校現場から要望されていたものだが、これまで具体的に動き出せなかった。この有識者会議の中で繰り返し提案いただき、計画にのせるということで後押しをしていただいたと事務局では感じている。「コロンブスのたまご」ではないが、具体的に動き出せば、それは求められていたことなのだと改めて思う。試行を実施した後、実際に利用した学校現場のアンケートをとった。司書たちは自分で選びたいという部分と、天気の悪いときに時間外に取りに行かなくてもよくなったという部分と、選択できることが必要のようだ。場合によると、実際に図書館に足を運んで書架を見たり、本を確認したりすることを本来はしたいのだろうと思う。なかなか時間的にも難しい中で、例えば借りるときだけ図書館へ行き、返すときは行かなくてもいいなど、いくつかの選択ができる。そのあたりも好評の理由かと思う。

(荒川座長)

6つの項目について、大変意欲的にこれから実施していこうということだが、是非、うまくいくことを期待している。

(足立委員)

中学校の国語科の学習指導要領を最近見直して、読書指導法を開発するという仕事をしている。平成20年の学習指導要領は、読書をするということがきちり位置づけられている。だんだんよくなってきていると思うが、一般的に、先生方はこういう活動をするときにこの本が使える、ということの結びつきがうまくとらえられないのが現状だと思う。そこで、学校図書館支援センターになるのか中央図書館になるのかわからないが、こういう活動をするときに向いている本のリストのようなものを作るといいのではないか。例えば、感動したことを話し合うときに向いている本や、知らなかったことを知る本など、実際の教育現場で使われる、子どもの学習活動の「動詞」に当たる部分を前につけたような形でのブックリストは、結構使えるのではないか。その後、そのリストを参考にして本を選び配送システムで貸出をお願いしたいということで、うまく動いていくのではないか。

(荒川座長)

実施にあたっての提言だと思うので、よろしくお願ひしたい。

(高野委員)

ブックスタートのプレゼントの絵本の内容なのだが、これは吟味されていくのか。例えば今の母親たちを拝見していると、昔ならあかちゃんを見ればごく自然に「いないいないばあ」というようなコミュニケーションがあるのだが、今はなかなか母親の中から出てこない。『いないいないばあ』(松谷みよ子/文)というすばらしい絵本があるので、私たちは薦めたりもしている。また、間藤委員が紹介した絵本など、子どもは母親とのぬくもりの中で、言葉ではなくて絵を見ていく。言葉をすごく習得する時期なので、美しい言葉や心地いい言葉を母親のぬくもりの中で感じたときに、それがいっぱい蓄積している。1歳の後半から2歳くらいになると、言葉が適切に使われていくので、本当に大事なスタートだと思う。その経験がない母親がたくさんいるので、ブックスタートの意義を話して、母親もすぐは入れるような楽しい絵本を選んで、うちへ帰ってその絵本を活用しないともったいない。帰ってから大事な宝物の子どもに読んであげよう、という気持ちを持っていただけたらとてもいい。よく吟味して絵本を与えていただけたらと思う。

もう一つ、22年度の取組の関連だが、保育園などの絵本コーナーの充実とあって、200冊くらい配布という話が先ほどあったが、保育園やいろいろなところで、絵本を持っている内容がずいぶん違う。その200冊というのは、自分たちで選んでいいのか、それとも、この年代に大事なものなので一律にいただけるのか。まだその辺りまではっていないのか。

(事務局)

ブックスタートの本については、少なくとも複数の、例えば5種類、10種類ほどを複数の目で選んで用意し、保護者に自分の子どもに読んであげたい絵本を選んでもらうのがいいのではと考えている。パブリックコメントの中でも、そのことを求めている意見もあった。新年度に入ってから検討委員会の中で、その辺りも含めて検討していきたい。

保育課で取り組む「地域読書推進事業」に関することだが、だいたい1か所20万円程度になるのかもしれないが、すべての保育園や幼稚園、子育て支援センターに贈るということなので、どういう形で本を選んで、既存の保育園などが持っている絵本との関係をどうするかなど、制度設計については、新年度に入ってから検討がされるのだろうと思う。図書館としても、関心を持ってかかわっていきたいと考えている。

(間藤委員)

200冊という冊数よりも、20万円の中でという方がどうなのだろうか。すごくいい本で、結構高いものがあったり安いものがあったりとバラバラだ。冊数に縛られてしまうよりも、予算に縛られる。冊数としては少ないが、1,000円を下回る絵本は本当に少ない。そういう点ではどうなのだろうか。

(事務局)

その事業についてはこれからいろいろな面で詰めていくことになると思う。大事な点だと思うので、事務局ではその辺りを踏まえて、選書などにかかわっていきたい。

(宮下委員)

私たちが子どもの読書を考えるとき、何が課題なのかというと、小学生、中学生、高校生が本を読まなくなってしまったということだ。「子どもが」という漠然と大きく広げてとらえるのではなくて、小学生、中学生、高校生が本を読まなくなってしまったということだ。小さい子どもは昔に比べれば、はるかに読むようになっている。このような施策を推し進めるときには、初期の段階、やりやすい段階や、効果がある場面など、はじめの方をきちんと計画し、ブックスタートも同様だが、歩みをしっかりと進める。でも、1年、2年と実施して、ブックスタートも板に付くのだが、結局、小学生、中学生、高校生は、きっと読まないだろう、というのは変なのだが、長い長い年月がかかって、そこにたどり着くのではないか、なかなか効果が見えてこないのではないか。だから、お金のこと、人のこと、いろいろなことがあると思うが、小学生や中学生がどのような施策をすれば本を読むようになるのか、というところをスタートの段階で大事にみんなで検討、検証していかないと、きっといい成果が上がらないのではないかと思っている。

私がいくつかの学校を回らせてもらったり、ほんぽーとも県立図書館もそうだが、そこで働いている方たちはものすごく一生懸命で、かつてと比べたら何倍という力、あるいはそこに集まる親や子どもたちも含めて、大勢集まってもらえるようになってきている。多くの学校の司書は、とても頑張っていて関心も高く、熱心に一生懸命取り組んでいる。それでもなお、学校図書館が活性化しない。それは何なのかをどこかの場面で検証しないと、なかなか難しい。いくつか手だてがあっても、校長や司書教諭の先生たちなどの研修を進めることができるのだが、「こんな効果がある」といってみたところで、集まってきた人たちは、理解をしてくれると思うが、実際、自分たちが本を好きになり、本のおもしろさを子どもたちに伝えるいうところまでは、なかなか結びつかない。その辺りのところを丁寧に進める必要がある。これは施策というか、この計画とは少し違うが、十分に考えて進めていただきたいと思っている。

(荒川座長)

今の話は、「学校図書館活用研修会」あたりが一番近いのか。学校自体がもう少し頑張れという激励だと思うが、そのようなメッセージを学校にどう出すかということも、大きな問題だと思う。

(間藤委員)

今の宮下委員に関連してだが、こういう計画を立てて予算をつけると、効果について検討

みたいなものを必ず求められる。こういう活動というのはすぐに効果は分からない。もっと息の長い、このときはあまり関心を持たなかった子どもが、あるとき何かのきっかけで、例えば大学に行ってから目覚めていくということはいくらでもあり得る。我々の時代は、何もなくてどこで本に出会ったのか、時代が違うので同じことは言えないのだが、どこかで出会っていくということを感じていく姿勢というものも、ときに必要なのかと思う。後に必ずそういうアンケートをとって、結果を報告するということは、どこかで求められるはずだ。

(荒川座長)

今は評価、評価で、すぐに形に見えるものが求められるのだが、教育の一環とすれば、宮下委員が言うように、長い目で見ていくということが必要だ。

(間藤委員)

もう一つ、前文で少し気になるところがあった。それは「2 場所と時間」の「図書館はもちろん、家庭にも」とあり「本を読むのにふさわしい場所と時間」という表現がされている。保育園、幼稚園、学校はいいのだが、「家庭にもふさわしい場所」といった場合、果たしてそれをどういうふうにとるのか。親の膝や、ちゃぶ台だって場所だと、もう少し柔軟にとれるような表現はないのかと思う。そうしないと、少しきまじめな親は、「うちにはそんな場所がない」みたいな、そういう家庭だってないとは言えない。

(事務局)

間藤委員に「膝も場所だ」と教えていただいたので、例えば、これからのブックスタートの広報に、是非、使わせていただきたいと思う。

(荒川座長)

それは、具体的なところを出した方がいい。

(間藤委員)

その方が具体的でいい。

(足立委員)

宮下委員が言われたことで、もう少し上の学年の人たちにかかわるのだが、昨年10月末に、新潟市の中学校の先生方で、学校図書館を担当してる方に講演をする機会があった。2人組で読書をする方法を少なくとも1時間、場合によっては2時間授業を使って、最初は本を選ぶというのを1時間目に、3週間くらいあけて、2時間目に本について話し合いをする活動や、紹介するためにポップを作ったり、手紙の交換をするなど、さまざまな活動を組んで講演で発表した。中学校の先生方30人くらいが講演を聞いてくれ、これが中学校でできそうかというアンケートを取った。その結果を見ていろいろと感ずるところがあるのだが、2

冊本を集めるということについて、新潟市の図書館、ほんぼーとを中心とした図書館の本を借りて実施したので、その方法が非常に使えることを中学校の先生方はよく分かって、「これはできそうだ」とアンケートに書いてくれた。

その一方で、一人パートナーがいるわけだから、自分が読んでこない相手に迷惑をかけるのだ、という気持ちを持って読んでくれるだろうと思ったが、読んでこない中学生がいるというのが現状で、しかも、本をなくす中学生が何人か出た。これが現状だと、私は非常に強く感じた。そうなる、中学校の先生は、本をなくしてはいけなから、こういう活動はやめようというふうを考える。それは教師としての責任だと思うのだが、少しおおらかな目で見て、最初は慣れていないからなくしてしまうかもしれない。しかし長い目で見たら、やはり中学生のときに学校図書館なり、公立図書館の本を貸して読んで来るといふ積み重ねが大事なのではないか。配送システムが行われたり、これからいろいろなことを進めていくが、うまくいかなくても、先ほどの間藤委員の言葉にも触発されるのだが、信じて頑張ってみる、長く続けてみるということがすごく大事ではないか。動かないことには現状を改善することはできないと思うので、お二人の先生方のコメントを聞きながら、そう思った。

(荒川座長)

新しい取組に対してだいぶエールが送られたのだが、頑張っていたきたい。

(3) その他

(事務局)

送付した資料の中に、佐藤委員よりいただいた『新潟市医師会報』の抜き刷り(2010年1月号。佐藤委員が寄稿した「もっと本を！—新潟市子ども読書活動推進計画(案)が策定されました」)を入れさせていただいた。

(佐藤委員)

パブリックコメントを集めたいと思い、医師会員の仲間にこの活動を知らせたいということで、皆さんのことを個人的に紹介させてもらった。何の承諾も得ずに失礼した。

(事務局)

有識者会議の取組を委員の紹介を含め、非常に生き生きと書いていただいた。むすびのところで、「図書館仲間」という言葉をいただいた。本当にうれしく、職員の中で読ませていただいた。

(荒川座長)

佐藤委員、医師会の方では何か反応はあったか。

(佐藤委員)

残念ながら、身内では少し反応があって、多分パブリックコメントを寄せてくれた人もいたのだが、小児科医以外ではあまり話は伺えなかった。

(荒川座長)

私も見たが、非常によかった。

この会議は2年続いて、これが最後の会議になる。皆様方から最後に一言いただきたい。

(宮下委員)

私はこのほんぽーとの委員と、もう一つ、県の図書館の事業の委員をしている。県の図書館での仕事は、教師に子どもの本を読んでもらって、好きになってもらい、自分の仕事や授業に役に立つということを実感してもらおうと、いろいろな意味を込めてリストを作った。子どもの本で充実した教育活動をとということで、全学年というわけにはいかなかったので、1年生の学校生活を支える子どもの本のリストを作ってみた。

学校行事全般編と教科編ということで、国語・算数・生活科と体育について作らせてもらった。実際、避難訓練や様々な学校行事の中で、ただ訓練をすることも大事だが、子どもと一緒に事前に本を読んでおくと、その訓練がとても鮮明に見えてきたり、何もしなくても訓練についてはるかによく分かったりする。そういう本がたくさんあるということ、私自身もよく分かった。今までは、例えば国語にある『一つの花』(今西祐行/文)の勉強をすると、同じ作者のものや戦争文学を読む、このくらいの広がりの中で図書館を活用していく。社会科の調べ学習のときにもそうしていたわけだが、体育のときも図書館で勉強するというのはどういうことなのだろうか。水泳の授業のとき、こんなふうになると泳げるようになる、動物はみんな泳げるんだよ、人間だって泳げるんだよというような絵本を読みながら、自信や関心を持ったり、あるいは泳ぎ方の大事なポイントを学んだりできる。

リストは県の文科省指定の事業でもあったので、県内の1・2年生の全学級と特別支援学級の教室には、その冊子を入れるということで、喜んで協力させてもらっている。今までは楽しい本、心に響く本など、子どもにリストや本の紹介をしていたのだが、1年生と新1年生には、この中から35冊くらいの本、勉強ができるようになるよというような本もおもしろいと思い、紹介させてもらった。

先生方にはそれと並行して学級づくり、授業や、その構えなど、実際に授業が上手になる、とてもいい言葉が使えるようになるというような本も、私自身が冊子を作って紹介をしている。リストを後で何部か渡して、意見を聞かせてもらったり、どんどん書いてもらったりしながら、使ってもらえたら大変ありがたいと思い、今はそういう仕事をさせてもらっている。

(佐藤委員)

この会議に参加できて、本当にいろいろな刺激をいただいた。小児科医というのは、だいたい0歳から6歳くらいの子どもが中心で、小学校、中学校の生活はあまり意識の中になかったのだが、計画づくりを通じていろいろな問題を考えさせてもらったし、他の委員から学校現場の話をついいろいろ伺えて、とても参考になった。

小児科医の立場で言うと、20世紀は治療の時代で、21世紀は予防の時代と位置づけている。北朝鮮並みと言われている日本の予防政策も、何とか変えていきたいと思っているのだが、その中で子どもたちの教育というのはとても大事な問題で、読書というツールを通して子どもたちにもっといい方向に向かってもらいたい。

ご覧になった方もいるかもしれないが、つい先日もベネッセが2005年に実施した調査について再調査を行い、2009年の子どもたちの読書状況をデータで出しているが、やはり落ちている。現状はやはりそうで、僕のわずか二十数年の小児科医の経験の中でも、子どもたちがどんどん変わっていると感じている。この委員をさせていただいたことをきっかけに、読書だけではなく、いろいろな形で子どもの健康の周辺の問題にかかわっていきたいと思った。これからもいろいろな機会でご指導いただければと思う。

(高野委員)

私も有識者会議に参加させていただいて、ほんぽ一とや有識者の皆様に出会い、自分自身が大変勉強になり、感謝の気持ちでいっぱい。保育園の子どもを通して、読書が大事であることはとても分かっていたのだが、私たちからは小学校から中学校と、すばらしい橋渡しをしないといけないのではないかと、毎回痛切に感じさせてもらった。またもう一度持ち帰り、このすばらしい推進計画がいい形で進んでいけるよう、微力ながら応援させていただきたいと思う。

(間藤委員)

最初、メンバーになっていただきたいと言われたときに、一番抵抗があったのは「有識者会議」という名称だった。僕はすごく読書好きだが、「有識者というのではないな、こういう会議はきっと堅苦しくて窮屈なのだろう」と思っていたのだが、それは完全に裏切られた。非常に自由に好きなことを言わせていただき、皆さんの様々な意見を聞いて、本当に楽しかった。会議に参加して、ほんぽ一との打てば響くような形で、あるいはもっと大きい響きで返してくれ、大げさなことを言えば感動した。本当に楽しく過ごさせてもらい、「有識者会議」というのが気にならなくなった。

(正道委員)

私も有識者では全然ないのだがという感じで、これでいいのかと思いつつ、結構言いたい

ことを言わせてもらった。私も出席させてもらって、改めて勉強し直して自分のためにもなったし、こういう形でまとまって、それが動き出したことがとてもうれしく思う。こういう会議を開いた、こういう文書ができた、はい、それで終わりではなくて、ここからがスタートだということ、これから課題がいろいろあると思うが、その中で少しでもお手伝いできたらと思っている。

先ほどの間藤委員が紹介された『これはおひさま』は、あかちゃんも好きだが、小学校5、6年生くらいでも、読み聞かせで息をつかずに読むと、「ええっ」などと言って結構感心してくれる。それが谷川俊太郎の詩だということを知らないであかちゃんのとくに読んでいて、もっと大人になって谷川俊太郎の詩と出合ったときに、『これはおひさま』の人だったという気づきもあったりする。すぐに効果がでなくても、人間が育つのに10年、20年かかるように、本との付き合いも結果が出るのに、明日、明後日ではなくて、5年後、10年後という長い目で見てほしい。

(足立委員)

昨年5月のフォーラムの際に、プログラムに掲載するため何か100字ほどでメッセージを、ということがあった。そこに私は「読書は人づくりまちづくりの基本です。読書活動が充実しているまちは住みやすいまちではないでしょうか。このフォーラムで読書活動をどのように進めたらよいのか、そこに人々はどのように関わればよいのか、議論していきたいと思えます。」と寄せた。当日はあまり議論できなかったように記憶しているのだが、この会議に参加しながら、あるいはフォーラムの中でも私の頭の片隅にあったのは、外国の公立図書館の姿だ。この会議で話をしたことがあったかもしれないが、特にメキシコの公立図書館の状況などを思い起こしてみると、やはり図書館が充実していないところというのは、まち自体がだめだと、だめという言い方はきつすぎるのだが、そんな感覚がある。

一方で、私は普段、国語科の授業の中で、読書活動をどう取り入れるかということをして仕事のメインにしている。新潟市の学力向上委員会のメンバーにもなっており、全国学力学習状況調査の点数を少しでも上げていくことを新潟市として実施していこうという委員をしている。そちらの方は、国語の授業をこういうふうにすれば点がよくなるのではないかと、ということを一生涯懸命にやっていた。たこつぼではないのだがうんと細かい話になる。本当は言葉の力、読む力、力という言い方がふさわしくないほど読むということにかかわって、人間の行いというのはダイナミックなもので、そういう細かいところだけ動かしても、全体が動くということにはなかなかならないのではないかと、とずっと思っていた。メキシコの例や外国の例を見て、自分自身が細かいところを気にしながら、本当はもっと大きくよくするには、と思っていた。そんな時にこの有識者会議の仕事をいただいて、少し大きなことに自分なりの視点

から携われたということが、とてもうれしく感じられている。

佐藤委員が書いてくださった寄稿文が非常にうれしく、委員の先生方のキャラクターやそこに参加させてもらったということを、本当に自分の喜びとして感じられる文面だった。

これまでのお話の中にあっただけだが、図書館の方々、打てば響く以上のことをしてくれるので、言えはできるのだという感じがしてしまった。それが私にとってはとてもいい感覚で、普段、大学で学生相手に仕事をしているのだが、何か発言すれば、ことは動かせるのだというポジティブな気持ちを持たせていただき、その意味でもこの会議に参加して、非常に楽しかった。

(荒川座長)

この会議の座長を仰せつかり、メンバーを拝見して、私以外はすべてある意味でのスペシャリストであり、プロである。アマチュアの私がなにかと戸惑い、遠慮もあったが、この2年間、会議を通していろいろなことを勉強させてもらった。私自身がむしろ勉強させてもらったことに、大変感謝している。本当にいいお話ができたし、また、この会議を通じて新潟市立図書館の皆さん方がこれを真摯に受け止めて、これから前向きに新しくしようという決意や具体的な案を、今日拝見して大変うれしく思う。是非、この計画がうまくいってほしいと心から願っている。

佐藤委員の文章は、大変おもしろかった。私は医学部を昭和35年に卒業して、今年50年経った。実際に教育に携わって責任を持ったのは昭和47年からなのだが、ずっと見ていて、医学部の学生はよく勉強するのだが、人間性の涵養という点では、自分自身で教えながら不満があった。それが今の医療や医療者側の批判につながっているのだろうとっていて、その辺りを何とかできないかと前から運動している。今は、高校を卒業してから医学部へ進むのは早すぎる、大学で勉強してから医学部へ進むという、50年の歴史を持っているアメリカ、カナダの方式がいいということで、日本もそうしたらどうかという運動をしている。それは今、オーストラリア、イギリス、韓国に広がっているが、これは一つに人間性の涵養という意味だ。その中には、読書を含め広く専門以外のことを勉強する、ということが大きな位置を占めている。

平成14年に大学を去ってからは、高校を自分で回って医学部進学生徒と懇談するというようなことを今もやっている。私は反対したのだが、新潟高校がメディカル校進学コースを作った。今の校長先生が、話をしてほしいというので、毎年必ず呼ばれて講演をしている。そのときに、私が医学部を志望する人は司馬遼太郎の『胡蝶の夢』を絶対に読んでほしいと話をしたら、新潟高校の高校生の読むべき本の中に入れてもらった。今年は池波正太郎の『鬼平犯科帳』がいいという話をした。そんなことばかりしている。実は私もこの歳になって、

初めて読書に目覚めているという感じになっている。

「新潟市教育ビジョン」を策定するときにも少しお手伝いしたが、新潟市が前向きになったことで、ますます頑張っしてほしいと思っている。また、子どもがどういう形で応援できるか分からないが、是非、また委員の方にも今後ともサポートしていただいて、この事業が息長く続くことを願っている。

(事務局)

事務局で、図書館以外に市役所のほかの課から参加してくれていたメンバーがいる。おわりにあたり、少しだけ発言させていただきたい。

(保育課 齊藤)

委員の方から貴重なご意見をいろいろ教えていただいて、本当に勉強させていただいた。保育課の立場として、子どもたち・乳幼児に、読書とまではいかないが、絵本が大切だということを改めて伝えて、また、現場に浸透していけるようにと思っている。

(学校支援課 仲川)

学力向上ということに関して足立委員からは、新潟市学力向上委員会の席上でも持論を展開していただき、本当はそれを全面的に受けてやっていきたいのは山々ながら、目前のことにとらわれてしまっているジレンマを感じている。この会議に参加させていただいて、最後にお話のあった保育園、幼稚園から小学校、小学校から中学校への橋渡しの必要性を私自身も感じている。私自身、来年度からまた現場に戻るが、管理職として、現場の中で子どもたちと本との出会いの場をたくさん作れるようにしていかなければいけないということを、今日、最後の会議に参加させていただいて、肝に銘じていた。本当に委員の方から、貴重なお話を毎回伺うことができた。

(事務局)

学校現場から二人司書が参加していた。今日は一人、学校の行事で出席していない。代表してお願いしたい。

(鳥屋野小学校 青野)

学校現場では得られない、いろいろな勉強をさせていただいた。いい経験になった。私は4月から西川図書館の学校図書館支援センターに行くことになったので、この経験を活かして頑張りたい。

(事務局)

事務局メンバーは、2年間付き合わせていただいた。事務局会議というものを毎週持っていて、先週行った会議が76回で最終回となった。いろいろなことをおこないながら私どもも学ばせていただいた。一人一言ずつ感想を述べてもらう。

(事務局 真島)

子ども読書活動推進計画に参加させていただいて、また新たな気持ちで自分たちの生活も、周りも見えてくるのではないかと思った。

(事務局 餅谷)

このような大きな計画の準備に携わらせていただいて、いろいろな方々のご意見を聞き、また、市役所内の横の連携もでき、本当に勉強になった2年間だった。実際、今は現場にはいないが、今後、現場に戻ったときに活かしていけるように頑張りたい。

(事務局 真柄)

1年間だけのお付き合いをさせていただいたが、皆様からいろいろとお話を伺うことができ、大変勉強になった。お礼を言っても言い尽くせないほどだ。

(事務局 金子)

2年間、いろいろと学ばせていただいた。私は中央図書館でティーンズサービスの担当ということで、参加させていただいたのだが、皆さんのお話を聞いて、中学生、高校生の読書量が少ないということで、これからいろいろ考えて支援をしていきたい。

(事務局 三條)

中央図書館の「こどもとしょかん」担当ということで、この計画づくりに参加させていただいた。地域の子どもたちだけではなく、新潟市全体のことを考えるという大きな仕事をさせてもらいとても勉強になった。この春からは山の下図書館へ行くことになった。今度は、自分たちの地域から新潟市を大きく見たいと思っている。

(事務局 子安)

いいお話をたくさん聞かせていただいた。この2年間の中で本当に具体的な、今後ずっと読書、新潟の子どもと本、お話の世界や子どもの成長を支えていく大変いい柱を作らせていただいた。皆さんからの力強い叱咤激励、これもあれもいろいろご意見をいただき、少しずつ動けたということで大変感謝している。この柱を支える一人として、今後も頑張っていきたい。

(事務局 上山課長)

小学校高学年、中学生、高校生になると本を読まなくなるというようなお話があったが、私自身を振り返ると、まさしくそのとおりだった。幼稚園に入る前、父が買ってくれた本を読んでから結構本が好きになり、小学校の低学年くらいに学校の図書館へ行って読んだような記憶があるのだが、それ以降はほとんど本を読まなくなった。読書活動推進のための方策を考えるうえで自分の歴史を振り返ると、そこから何でこうなったのかと検証すれば、その方策も出てくるのではないかという気もした。

荒川座長が言われた、国語の力がないと勉強ができないのではないかと、私も昔から漠然と感じていた。すべての学力の基礎は国語だ、言葉の力がなければ何もできないだろうという気持ちはずっと持っていた。

(事務局)

最後に、八木教育次長からお礼の言葉を申し上げます。

(八木教育次長)

一昨年の11月22日が初回の会議だった。会議の名称を「有識者会議」としたが、私自身も有識者会議という言葉自体、若干抵抗感があった。子どもの読書活動を推進するということで、あえて有識者に集まっていた。それぞれの分野から専門の方々、あるいは現場で場数を踏んでいるの方々をお願いしたが、それぞれ分野が少しずつ違うことから、集まって話が進むのだろうかという懸念も持っていた。9回の会議と教育フォーラムも含めて公式の会議が10回となる。個人的なレベルでは、それ以外にも数多くの現場の視察等々を重ねていただいた。それぞれの委員が皆様の熱を持って語っていただき、共通理解ができてきたことを、大変うれしく思っている。皆様から共通していただいた、「大人が読書好きにならなければ子どもは読書好き、本好きにならない」という言葉を、引き続きメッセージとして発していくことが、子どもの読書活動推進のために必要と、職員も共通理解をしています。まずは自分からというようなことだろうと思う。

くしくも、今年が国民読書年という年に当たる。タイミングよくこの年に「子ども読書活動推進計画」をまとめていただいたことに、感謝を申し上げます。

委員の皆様には、2年間にわたり大変ありがとうございました。今後ともいろいろな場面でご協力いただければありがたいと思います。

4. 閉 会

(司 会)

それではこれで、新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議、最後の会を閉じさせていただきます。